

烏尾敏祖全集

しまお としお ぜんしゅうだい かん
島尾敏雄全集 第3巻

一九八〇年七月二五日発行

著者 島尾敏雄

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二二一―二二

電話東京二五五局四五〇一(代表)・四五〇三(編集)

振替東京六一六二七九九

堀内印刷・美行製本

© 1980 Toshio Shinao

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。
〔検印廃止〕落丁・乱丁本はお取替えます

島
尾
敏
雄
全
集

第5卷

晶文社

唐草	7
アスファルトと蜘蛛の子ら	37
公園への誘い	56
砂嘴の丘にて	72
鎮魂記	98
ロング・ロング・アゴウ	123
宿定め	166
階段をころげ落ちた事	194
ちっばけなアヴァンチュール	196
ソテツ島の慈父	229
摩耶たちへの偏見	249

黄色の部分

アスキーティッシュ自叙伝

いなかぶり

旅は妻子を連れて

夜の匂い

361 341 320 291 269

ブックデザイン

平野甲賀

唐草

玄関の表札には彼の名前が出してあった。

父は一週のうち時々夜帰って来て、その翌朝出かけて行った。彼はふと母は父と別れるつもりではないかと錯覚を起すことがあった。大人たちのからくりはもつともなようで、よく納得出来ないまま彼はその意味に少しも気づかず、そして何も知らないのと同じであった。家の中はひどく気が抜けて父の帰らない夜が続き寂しくて仕方がなかった。大っぴらに父の店に同居していた時は、すべて当り前過ぎた。それがばたばたと山の手の住宅地帯に引越して来たが、そこはその地帯の他の大きな家とは違って四軒も同じ形の家が並んだ安っぽい文化住宅で、赤いスレート瓦が葺いてある洋風まがいの長屋だ。ただ新築したばかりというのが取柄であった。そして表札には彼の名前が掲げられた。その字は父が書いた。彼は父の字はあまり好きではなかった。教科書などに名前を書いて貰う時も、筆の先を唇でしめして、大福帳に記入する調子で軽く書き込まれるのがいやだった。直ぐに字を間違われそうだった。それに比べると母の慎重なふつくと肉付のいい字の方が気に入った。毎日見る表札の自分

の名前が、身体のどこか片隅にかさがなおりきらずに残っているように不快なしみになって記憶の底に淀んだ。然し一軒の新しい家に、自分の名前が表札になって出ているのは、新たな気持がした。それはやはり生れて始めての経験であつた。母は父の正式の妻にちがいないが、近頃になって別れてしまおうとしていたとしても仕方がないし、やがてはそれも構わないような気がして来たのが不思議だ。それの方が生活にはずみがついてくるように思えた。そして彼の責任が急に加重されて、学校への往復の坂道を、へんに熱っぽくなって力んでいることがあつた。気のせいか、此の頃の母の立居の振舞が若々しく見えた。

長屋の四軒の中他の三軒にどんな人たちが住んでいるのか、彼にはそれを知る興味は少なかった。世の中の色んなことは案外その大部分を眼で見えて来ていたのだろうが、ただそれだけだ。とんぼや蛙の眼玉のように、ぎょろついているばかり。結構自分では大層な厭世家のつもりなのに、日記にはふき出すような軽いおきまりの冗談口ばかりしか書けない。気がついてみると、隣人は日かげの生活をしているような人たちばかりだ。少し雨が余計降ると道がそのまま谷川のようになってしまう勾配の急な坂道から、直角に横道にはいつて四軒並んでいたが、そのとつきに外国人と同棲している若い女が住んでいた。彼には彼女がダンサーのようだとしか形容が出来ない。中学生の彼にダンサーの生活が分っていたわけでもなかったから、ただ何となくダンサーみたいだと思つていたに過ぎない。大へんはでに見えた。窓々のカーテン、そして玄関横の格子戸からのぞかれる部屋の中の様子が西洋臭く、彼女の大柄でむんむんする姿勢はひどく彼に隔たつて感じられる。彼女は、道ばたを風に吹かれている新聞紙位にしか彼を値ぶみしないに違いないと彼は思い込んでいる。夕方彼女の家にその外国

人が帰って来るがそれは毎晩のようでもなさそうだ。へんに甲高いアクセントでヤエちゃんヤエちゃんと呼んでいるその外国人の声を通りがかりに聞く事が出来た。

二番目の家は小役人風の中年の夫婦者。然しここの主人を彼は見かけたことがない。夜など家の中で主人らしい気配を感じるだけだ。そして三番目は、つまり壁一重の隣りだが、粹な色白のおばさんが住んでいた。おばさんでは感じが出不来。水商売のおかみさんのような所もある。年は若い。然し若奥さんでは言い切れないはみ出してしまふものがある。彼は隣りのその女の人を美しいと思った。それは日がなみがいているとしか思えないつやつやした肌で、全体は小づくりだがはだかになればふとっている感じだ。細いきれの長いまゆと小さな口もと。きゅっとしまつて、上唇が少しそり加減の所が一層彼の気持をひいた。年頃は彼には分らない。然しもう御主人持ちではないか。それは彼を遠い気持にさせる。近頃右頬に大きなきびをこしらえているのが彼に少しみだらな色っぱさを感じさせる。よく泣くできものだらけの赤ん坊とばあやがいた。そしてその家も旦那さんは毎日帰って来るわけではない。この女の人は彼を少し意識している。それだけ彼ははずみがついてその女の人の顔を見たいと思うが、めったに外には出ない。出る時は金目のかかった地味な渋い着物を着て出た。

彼は学校は面白くなかった。ものうくて仕方がない。どうしてみんながはしゃいで元氣よく動き廻り、試験の時には点をよけいに取ることにまっ当な執着を示してみせるのか分らない。彼はみんながカンニングをしてまで成績をよくしようとするエネルギーに圧倒される。クラスには嫌いな生徒が沢山いた。然し何かのきっかけで感情が險悪になると、きつと口では言い負かされてしまう。きつぱり

言い返すことが出来ない。その後でメスをポケットの中にしのばせて突っついてやりたい程にくやしく思うが、実行は何も出来なかった。

彼は中学生はけだものだと思った。にきびのふき出た顔のきたなさ。声変りの醜怪さ。精力の強い奴は洗濯はげの上に垢光りのしている小倉服がはちきれそうな程に意地汚なくもりもり太っている。そうでなければ彼のようにやせて精気のない色つやで余計貧弱そうに見える同じ小倉服。彼は電車のドアのガラス戸や街の通りの飾窓に自分の姿を写してみる。そしてうんざりする。やせているだけでなしに少しも可愛げがない。何よりも顔に油気がなく、かさかさして皮膚がささくれ立っていた。鼻のまわりに、にきびのような脂肪が汚くかたまり、無理にはがすと赤くただれた。ぼやぼやとした薄汚ない生毛が顔一面所きらず生えて来て垢がたまつた。その癬胸の中で彼はお伽話の中に出て来るような、たとえばそれは美しい王女に寵愛されたく思っている。その対照の妙がいやになる。彼はその年になるまで一人の恋人らしい少女をも所有していないことにながかりしていた。自分の生涯に恐らくそのような女の人が現われることはなく平凡な見合結婚をして、子供を作つて年をとつてしまふのではないだろうか。然しそれも実感ではなく、自分は年上の女か、又は悪い女の人に可愛がられるのに違ひないと思つたりする。鏡の中に写つた彼の血色の悪い分別臭い顔。彼はクラスの者の中に、あんな身体つきや皮膚の色になり度いと思うような者を二、三人持つていた。彼等はそのことを知らないであろう。彼だけがひそかにそう思つて淡い氣持を抱いているだけだ。然しその連中と何かの加減で声をかけ合うようなことがあると、彼は涙ぐむ程楽しい氣分を味わうことが出来た。

交友範圍も極く狭く、それも輕蔑しながら輕くつき合つていた。学校の往復に道づれになつて貰え

る程度に。その友人の一人でいつも紅顔の腰が太く足の長い少年から、彼に近所の女学生がペーゼをして呉れと言ったがしてやらなかったという話をきいて、もう自分は世の中へ挑戦して行く資格を放擲した気分打落されたことがあった。ペーゼという外国語もいやな感じだったが、そういう秘めごとの豪華な重量が自分に関係がないと思うことで、世の中は半分えぐり取られた残りの粕のようなものに見えた。

世の中のあらゆることが彼には不得手に思えた。ただ一つ、彼に微笑んで見せる世界が残されているように思えたのは、それは彼の持病の発作の起る時だ。それに彼は眼華という名前をつける。その経過が彼には手に取るように分る。先ず机の端か何かにひっかかってよろめくようなことがあったとする。そんな時に突然その端緒が始まった。来たな、と思う。視界の、というより視覚の斜の上のあたりで盲点の部分がふわっと現われる。そこに物の貌はうつらない。餘がとけて流れたような具合に。それが次第に生きもののくらげのような活動をはじめ。しばらくするとそのくらげのようなものが数を殖やして来る。やがてくらげが一ぱいになる。くらげが一ぱい動き出す。ふわふわと動き出す。そのうちの一つが落下傘のように斜めに下降し出して、ある処に來ると、ぱっと消える。と又もとの高い位置に次の下降を始めるくらげが現われていて、前のもののように斜に下降をし始める。前のものが消えた所に來ると、ぱっと消える。そのくらげの所だけ物の貌がえぐり取られて消えている。後頭部がうしろに引ばられるような不安定な気分。そのくらげの下降のくり返しがしばらく続くと、やがてくらげ共は消え去って、一つの歯車の中に吸収されてしまう。その歯車の形は完全ではない。まず弧の一部分だけが最初に現われる。それがちかちか視覚の片隅で廻り始める。次第にその弧

の長さが増して来て完全な円を作ろうとする。その為には彼は自分の顔に、火花のように明滅する円光をかぶったふうになって、花やかな世界の中に立つ。またその弧の部分の物の形がえぐられて見えな
い為には、本を読むことも出来ないし、遠近の判定を失い、字も重なってまともに書くことが出来ない。
ただ時の推移にまかせるより仕方がない。やがてその弧が完全な円になる頃にはその歯車は無限大の
大きさの感覚で彼の頭のうしろの方にしりぞき、そのうち全くその形を消してしまふ。その後で猛烈
な頭痛がやって来る。それは丁度三十分程続く。その三十分の頭痛が終ると胃腸のあたりが、崩れ出
すのだ。頭痛のあとの不愉快なしりが頭に残り、胃腸のにおいの悪い溶解で、おくびが続き、やが
て眼華の襲来の一コースが完了する。その一コースを経過するのに大体一時間位あればよかった。一
時間だけ医務室のベッドにでも寝ていれば、その後でいつもの授業をすっかり受けて帰校する事が出
来たが、彼はそうはしなかった。最初のふわとした発作の端緒が発生すると、道具を風呂敷に包ん
で、受持の先生の所に行った。

「先生悪感がして眼が半分見えませんのです」
年をとった教諭が、煙草くさい顔を向ける。

「何、眼が半分見えない？ それはいけない。早くお帰り。顔色が悪いね」

彼はこの受持の年寄りの先生にだけは可愛がって貰えているのだと思う。それで眼の見えないこと
は事実でありながら、彼の意志の上ではっきりその先生をだましていることをふと悲しく思う。然し
みんながいやいや勉強している学校というかたまりをうしろにして、誰も通らない学校への道を逆に
停車場の方に下りていく時の気持は独特のものだ。彼は学校全体のかたまりに向かってねじけた優越を

感じたが、それはみんなと一緒にやって行くことを投げ出してしまった寂しさにつきまといわれた。今日一日だけ自分は勉強がおくれてしまった。それはもう決して追いつけない。而も自分はさっきまで学校に出ていてその半分は出席してこの目で見この耳できいていたのに、投げ棄ててひとりでの坂道を帰って行く。それは彼にとっては寂しいものであった。自分は他の誰もが我慢してやっていることが我慢出来ないのだという劣弱のコンプレックスで打ちひしがれているのに、学校全体を、嫌いなクラスメートをも含めて許してやることが出来るようなこんがらがった気持ちを抱いて坂を下った。

然し彼はその時だけは解放されていた。一番自分らしい気がした。自分が自分で苦勞してピントを合わせてやっとな定着させることの出来た世界の或る次元が、早引きの帰りの坂道の中にひそんでいると思った。犬や猫や鳥やとんぼやひき蛙が人間に近く感じられる。それらのけだものや虫が彼に同情していると感じることは、ひどく力強く、自分のことも少し許せる気がした。彼の持病のその発作の時に。

或る日、学校で彼に猥褻本が廻されて来た。同じクラスの級長が彼に貸して呉れた。もう中学校を卒業するというのに彼はそういうことに無知であった。父が夜だけ時々帰って来てその翌日又出かけて行くことを意味のない生活のように思っていたのだから。いつか不良だと言われている生徒からマシカクという言葉を引きかじった。彼の知らないそういう単語が世間で流通していることは不都合なことだ。中学生の仲間のうちで不良らしく姿勢を崩すことは尊敬に価すると思われた。帽子の縁の針金を抜き、上着を短かくし、ゲートルを下の方にちよつと巻いてズボンをゴルフパンツのようにする。そういう連中が、彼に思わせぶりにマシカクという隠語をちらつとのぞかせた。「あんたら知らん方が

ええよ」「あはははは」彼は□という俗用国字を連想する。なまたまご有り□。真四角。そして痒くという動詞への飛躍。彼は黙って聞き流している。畜生！ 今に見て居れ。その気持は矢張り中学生のエネルギーだ。やっと masturbation という単語を獲得するまでに多くの日にちを経過させる。不潔な言葉だ。彼にとって其の地帯はタブーだ。然し彼は猥本の効用を知る。それは身体を動かさないで身うちがほかほかあたたまって来る。帽子のしんにわざわざはがねを入れてぴんと殊更に東西屋のようになっている「堅パン」の級長が先輩の顔付で廻して呉れたその本を彼は授業中に読む。それは、ノートを破ってばらばらになって各枚に頁数を打ち、間違いだだけの「てにをは」でたどたどしく書いてあった。彼はノートと教科書の下にそれを置いてその間に一行ずつ現われるようにして読んで行く。あの場面のオノマトペの連続。身体ががたがたふるえる。然しそれもやがて血行がよくなるに従って、ぼっぼつと頬から焰が吹いて来ることでふるえが止まる。いつもは血色の悪い彼の、授業中の秘めごとが誰かに気取られはしないか。あたりを見廻し、自分の頬を両手で触ってみる。ひんやりと掌に頬のぬくみに移って行く。彼が横目で教室の中を見廻してみても何回目かの時に、ななめうしろで服装を不良らしく思いきって崩した一人の生徒が目合図で、それをその次に俺に廻せという意味の電波を送って寄越す。何ということだ、彼はそれにいそいそした反応を示し出している自分を感ずる。その仲間と見られたそふりを示されたことがこんなにはげみになるということは。棒組仲間へ傾斜して行く媚態、その満足の中で彼は自分の未熟さ加減をはっきり覚えこむ。

彼は帰途の汽車の中でも、まだあの午後のほてりを持続していることに驚いていた。車内の大人たちがもう一遍違った気持で眺められる。早引きをしない時は彼は授業が終ってもぐずぐずして早

く帰らない。そろそろみみずのようにつながって帰るのがいやであった。そうかと言って、そろいのユニフォームに着換えて運動場でスポーツを練習する運動部に籍を置いていたのでもない。あの若鮎のような肉体使用はどんなに鬱屈が散らされだろうと入部の決心を幾度となくかためたこともあったが、それが時々でなく毎日やらされることが重くのしかかって決断出来ない。それで彼は三階の一番はしっこの図書室に行つて「大菩薩峠」を読んだり、山岳部の部屋に行つて山の本を何となくみてゐるうちに一時間位は経つてしまい、長い坂道を停車場に来る頃は、日中の短い季節などでは早あたりに黄昏がたちこめて薄暗い気配がただよう。その頃は帰宅の生徒の数も少ない。そして列車ダイヤの都合で省線電車ではなく遠くからやつて来た汽車に乘合わせるような時には、自分も遠い旅からの帰途のように疲れを覚えた。その日は大阪行の汽車に乗り合わせ終点に近いために乗客もまばらで彼は級長ともう一人の級友の三人で一つのボックスを占領して自堕落に深々と座席に身体を沈めていた。三人ともあの猥本でいささか興奮して学校の付近の丘々を歩き廻った。ひょっこり出た赤土の地肌をみせた溜り池のほとりで、三人は人生や哲学を語り合つた。西郷隆盛や高杉晋作、そして江戸川乱歩や直木三十五が話されていくらか気分ついていた。

「僕は新国劇にはいろいろかと思つてゐるよ。之が成功しなかったら、学校をやめてアメリカに行く」彼は心の中の秘密をすっかり打ちとけ合つたつもりで級長に話してきかせた。

「それがどういふことになるか僕はよう判断せんけど、要するに信念さえ堅ければいいと思うよ。然し学校だけは卒業して行けよ。そうあわてゐることはない」

級長が分別顔で言う。